純粋な絆

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
純粋な絆

【Ｎコード】
Ｎ１４１７Ｉ

【作者名】
坂田火魯志

【あらすじ】
秋山登と土井亨。高校で出会った二人は大学でもプロでもバッテリーであり続けた。その土井がトレードに出されようとした時秋山は。大洋ホエールズ史上最高のバッテリーのお話です。

第一章

純粋な絆

二人の絆が最初にできたのは高校時代であった。野球部で出会った。

「あれっ、御前サイドスローか」

「御前がキャッチャーか」

二人はまずお互いを見て驚いたのだった。

「随分と変わったフォームだな。それにしても」

「そんな小さい身体でキャッチャーか」

秋山登と土井亨の出会いであった。岡山東高校において二人は出会ったのだ。

二人のはじまりはこんな調子だったがその相性はよかった。秋山はかなりの実力者であり速球が滅法凄かった。そして土井は秋山のその速球を受けきった。

「御前凄いな」

「御前こそな」

今度は賞賛の言葉を言い合う二人だった。

「こんなに速いボール投げるなんてな」

「俺が投げたボールは絶対に受けてくれるんだな」

こう言い合うのだった。

「御前本当に凄いピッチャーだな」

「御前こそ見事なキャッチャーだよ」

二人共認め合うようになった。これが二人のバッテリーが誕生したその時だった。二人は高校の三年間バッテリーを組んだ。サイドスローの速球投手の秋山にそのボールを受けきる土井のバッテリーのことは東京にも聞き及び二人は共に明治大学に入った。

「おい秋山」

明大の監督である島野育郎は秋山が入部するとすぐこう命じたの

だった。
「御前はこれから一日千球投げろ」
「千球ですか」
「そうだ。いいな」
勿論練習はこれだけではない。あまりにも過酷な練習であった。
「それが嫌なら野球を辞めろ。いいな」
「わかりました」
秋山はその言葉を受けた。拒みはしなかった。そうして実際に彼は一日千球投げた。投げるからにはそれを受けるキャッチャーが必要になる。そのキャッチャーは一人だけだった。
「じゃあいいな」
「ああ」
土井だった。秋山の言葉に頷きそのうえでマスクを被る。そうして彼のボールを受けるのだった。毎日千球、投げて受けた。
その練習の介あってか秋山は抜群のスタミナと投球術を身に着けた。それは最早大学生の間では他の追随を許さないものでありそしてそれを受ける土井のキャッチング技術もリードもかなりのものになっていった。しかしそれで土井にとってはよくないこともあった。
打つ方が駄目になったのだ。打撃練習よりもキャッチャーの練習の方がすることがずっと多かったからだ。バッターだというのにこれはまずかった。
しかし島野は言うのだった。強い声で。
「それでいいんだ」
「いいんですか？それで」
「打たないのにですか」
「野球は打つだけじゃない」
彼は周りの者に言い切った。
「守備も野球だな」
「ええ、まあ」
「それはそうですけれど」

「ならそれでいい」
そうしてまた言うのであった。
「あいつはキャッチャーだ」
「はい」
これはどうしても否定できないことだった。彼のポジションは。やはりキャッチャーである。今や秋山のボールを受けられるのも明大で彼だけになっていた。
「キャッチャーだからそれでいい」
「守りだけでですか」
「秋山のボールを受けられるのはあいつだけだ」
彼もまたこのことを言うのであった。
「そして。あいつ程のキャッチャーもいない」
「だから打たなくてもいいんですか」
「そうだ。打たなくていい」
島野の言葉は続く。
「あいつは打つ以上の仕事をしてくれているからな」
「キャッチャーとしてですか」
「秋山のボールを受けてリードをする」
それが土井の役割だというのだ。
「それでいいんだ」
「わかりました。それじゃあ」
「土井はキャッチャーなんですね」
そういうことだった。土井はバッターではなくあくまでキャッチャーであった。秋山が投げて土井がリードをする、それにより明大は黄金時代を迎えた。当然ながらこの活躍はそのままプロ野球界の間でも噂になった。すぐにスカウトの話が来たのも当然の流れであった。

第二章

まず動いたのは何処かというと。巨人であった。
このチームの貪欲さは何があろうとも変わらない。それは不変である。
秋山と土井に関してもそうであった。二人を獲得しようと明大に働きかけた。そして話は順調に進み彼等の入団はまず確実になった。
その交渉の際だった。明大側は巨人に対してこう言ったのであった。
「二人一緒の入団ですよね」
「そうですよ」
巨人側のスカウトは横柄に答えるのだった。
「それでいいですよね」
「秋山と土井の両方ですか」
明大側はこのことをまた言った。
「二人一緒ならですけれど」
「何かありますか？」
「よかったら契約金を増やしてくれませんか」
こうスカウトに申し出たのであった。
「契約金を。二人一緒なら」
「何っ！？」
それを聞いた巨人側のスカウトはその言葉を聞いて顔色を一変させた。
「契約金を上積みされようというのですか！？」
「いえ、そういうわけでは」
「そうではありませんか」
スカウトは明大側の言葉を聞こうとはしなかった。
「そんな選手はいりません、この話はなかったことにします」
こう言って話を強引に打ち切ったのであった。これで二人の巨人

入団はなくなった。そうして大洋ホエールズに入団することになるのであった。
だが二人はこれを悲しまなかった。むしろ喜びとさえするのだった。
「俺達二人で巨人を倒すか」
「そうだな」
早速最初の巨人戦を前にして巨人側のベンチを見て言い合うのだった。
「俺が投げて」
「俺がリードしてな」
互いの役割もそれぞれ強く意識していた。
「それであいつ等叩き潰すか」
「そうしてやるか」
こう言い合いそのうえで試合に向かう。それからも巨人に立ち向かい続けた。彼等は大洋において巨人に牙を剥く存在となったのだ。
入団したその年に秋山は新人王になった。ハレは秋山だった。だがそのボールを受けるのは誰かというと常に土井であった。
「悪いな。俺ばかり目立ってな」
「おい、そんなこと言うなよ」
ある日居酒屋で二人で飲んでいる時に秋山がこんなことを言った。土井はその彼に対して笑ってこう言葉を返したのであった。
「それじゃあ俺が日陰者みたいじゃないか」
「別にそんなことは言ってないけれどな」
秋山はそれは否定した。
「何しろ御前が俺のボールを受けてくれてだからな」
「だから御前は新人王になれたって言いたいのか」
「ああ、そういうことだ」
秋山が言いたいのはこのことだったのだ。
「御前しかいないからな。俺のボール受けられるのは」
「俺だけか」

「他にはいないさ」
彼はまた言うのだった。
「練習の時でもな。御前じゃないと俺のボールは受けられないんだよ」
「他の奴じゃ無理か」
「ああ、無理だな」
秋山は酒を一杯やってからまた彼に述べた。
「御前だから俺のボールを受けてくれるんだ。それに」
「それに？」
「御前のリードなら俺も納得する」
今度はこう言うのであった。
「それでな。納得できる」
「そうか。納得してくれるか」
「御前が一番俺のことをわかってくれるからな」
「だからか」
「御前がいなくてどうして俺が投げられるんだよ」
秋山の言葉は本気そのものだった。
「そうだろ？だからな」
「そうか。俺もな」
土井も秋山のその言葉に応える形で言ってきた。
「他のピッチャーのボールも受けているけれどな」
「ああ」
土井はそのキャッチングもインサイドワークも見事なものだった。そして小柄ではあるが肩も滅法強かった。だから打てないながらもレギュラーになったのである。

第三章

秋山はピッチャーだからいつも投げられるわけではない。だから土井は他のピッチャーのボールも受けているのである。そういうことだった。

「御前のボールをずっと受けたいな」

「俺のボールをか」

「受けさせてくれるな」

にこりと笑って秋山に対して言うのだった。

「御前のボールをずっとな。いいか？」

「ああ」

秋山も微笑んでその言葉を受けるのだった。こんな話をしたこともあった。彼等の絆は永遠のものになろうとしていた。誰も引き離せないまでに。

日本シリーズ。あの巨人を軍門に下しそのうえで日本シリーズ出場を決めた。相手は大毎オリオンズだった。強力なミサイル打線を擁し世論では大毎有利との下馬評であった。

「俺達が日本シリーズか」

「何か夢みたいな話だな」

二人にとっては実感することが難しいことであった。

「本当にここにいるなんてな」

「巨人ばかりだったのにな」

当時は何もかもが巨人であった。ラジオも新聞もそして普及しだしていたテレビでも。何もかもが巨人であった。それはさながら北朝鮮のテレビでニュースキャスターがいつも一緒の人間であるのと同じであった。それを考えると今もそうであるが巨人こそまさに日本の朝鮮民主主義人民共和国である。

「それが俺達なんてな」

「なあ秋山」

土井は秋山に顔を向けて言ってきた。
「勝つか負けるかどうかはわからないがやってみるか」
「そうだな」
彼等はこう言い合ってそのうえで試合に挑んだ。最初の試合秋山は先発ではなかった。だが大洋を率いる男はあの三原脩であった。
伝説的な知将である。その采配はまさに魔術であった。その三原マジックが第一試合で早速出されることになった。彼は危機で秋山を投入したのだ。
秋山はマウンドに立った。その彼に対して土井はあるサインを出した。それは。
秋山はそのサインを見て静かに頷いた。それが何かというと。
彼はバッターに対してボールを投げなかった。投げたのは二塁ランナーに対してだ。牽制球であった。
「何っ！？」
「牽制だと！？」
誰もがこれに驚いた。しかし驚いたのも一瞬のことだった。ランナーはその牽制球で殺されてしまった。土井の好判断であった。
秋山にも弱点がある。どんな人間にも弱点があるのと同じだ。秋山は牽制球が苦手であった。竜巻を思わせるそのピッチングフォーム故にである。
だが土井はそれを逆手に取って牽制球を投げたのであった。それによりピンチを脱しそのうえで試合の流れを決めてしまった。第一試合は大洋の勝利に終わったのだ。
「まあ一勝位はするだろうな」
「けれどそれでもな」
しかしそれでもこう言われるのであった。
「大毎有利だな」
「勝てるものじゃない」
下馬評は変わってはいなかった。
「ミサイル打線が爆発する」

「大洋はそれで終わりだ」
やはりこうした評価であった。そしてその爆発の機会は早速次の第二試合でやって来た。大洋側から見て三対二で迎えた八回表、大毎は一死満塁という絶好の好機であった。
「よし、ここだな」
「ここで決まる」
球場でもラジオでもテレビでも誰もが固唾を飲んだ。
「ここで大毎が打つ」
「それでシリーズも決まるな」
「大洋はここから負ける」
こう言ってそれで試合を見守っていた。この時マウンドにいたのはやはり秋山であった。彼はここで土井とそのマウンドにおいて話をした。
「おい、防げると思うか」
「大丈夫だ」
土井は秋山の問いにまずはこう答えた。
「安心しろ。抑えられる」
「打って来るのならいいけれどな」
秋山はふとこう言ったのだった。
「打って来たらな」
「！？まさかとは思うけれどな」
秋山の今の言葉に土井はすぐに怪訝な顔になった。
「奇襲か？ひょっとして」
「外野フライ狙われてもそれで同点だ」
秋山はここで外野を見て。自分のチームの外野陣が当然ながらそこにいる。

第四章

「そこから派手に攻められるぞ」
「抑えるのは難しいっていうのか」
「一点差と同点じゃ全然違う」
負けているのとそうではないのとそれでは。確かに精神的にも非常に大きいものがそこにはある。野球をやっていればそれは肌でわかることであった。
「そこから気を楽にしたミサイル打線が来るな」
「じゃあ打ち上げられないように内角、それも高めを攻めていくか」
「そうだな。あとな」
「あと？」
「御前どう思う？」
秋山は真剣な面持ちで土井に対して問うた。自分より小柄なその女房役の顔を見ながら。
「向こうは何かしてくるとは思わないか？」
「何かか」
「感じるのないか？キャッチャーやってて」
こう真顔で問うのであった。
「感じるのをな。ないか？」
「そうだな。今満塁だな」
「ああ」
「それにワンアウトだ」
土井は球場全体を見回しながら今の試合の状況を秋山に対して語った。
「それに御前のフォームは大きいからな」
「俺のフォームもか」
「ああ、それもあるな」
土井はわかっていたのだ。秋山の投球フォームはあまりにも独特

なサイドスローである。アンダースローに近いそのフォームは身体をこれでもかと捻ったうえで出すまさに竜巻のようなフォームである。従って牽制球も不得手であるしまた投げてから守りの動作に入るのもいささか遅かった。
「だからな。ひょっとしたら」
「ああ、それか」
「それだ」
土井ははっきりとした顔で頷いてみせた。
「してくるかもな。注意しろよ」
「わかった。それじゃあな」
「その時は俺に任せろ」
土井はまた強い声で秋山に対して告げた。
「俺にな。すぐに動くからな」
「頼めるか？」
「俺達はバッテリーだろ」
ここではにこりと笑ったうえでの言葉であった。
「何でもやってみせるさ。安心しろ」
「そうか。じゃあその時は頼むな」
「ああ。任せてくれ」
そんな話をしたうえで彼等はそれぞれの場所に戻る。そうして試合が再開される。
「さあ打て」
「それで勝負を決めろ」
大毎ファンは今か今かと待っていた。秋山がボールを投げるのを。秋山がボールを投げればそれを強打してシリーズは決まる、こう確信していたのだ。
その秋山が投げた。ボールは一直線に土井に向かう。しかしバッターの谷本稔はそのバットを振らなかった。何と彼はバットを寝かしてきた。そうしてバントをしたのであった。
「バント！？嘘だろ」

「谷本でか」
誰もがこのことに目を剥いた。その強打で知られるミサイル打線のクリーンアップの中核がバントだ。そしてそれと同時に三塁ランナーはスタートを切っていた。明らかなスクイズであった。
大毎、それを率いる西本幸雄の奇襲であった。彼はオーソドックスな戦術で知られていたが何とここではそのスクイズという奇襲を採ったのである。
谷本はバントした。そのボールがころころと転がっていく。しかしそれはキャッチャー側に転がっていた。そうして土井はもうマスクを脱いでいた。
彼は冷静にそのボールを取りそのうえでまずはランナーにタッチした。これでツーアウトだ。同時に帰るべきランナーは死んでしまった。
続いてそのボールを一塁に投げそれでスリーアウトだった。攻撃は完全に終わった。大毎の奇襲はこれで失敗に終わったのであった。
「そんな・・・・・・」
「失敗か」
大毎ファンは今しがた目の前で起こった事態にまずは呆然となった。
「あそこでスクイズかよ」
「いや、あのスクイズ普通は成功していたぜ」
わかる者にはわかっていたのだ。
「誰だってあそこであんなことするとは思わないよな」
「ああ」
「確かにな」
言われてみればまさにその通りであった。

第五章

「あんなの。あそこでなんてな」
「絶対にないよな」
「奇襲としては最高だったんだよ」
まさにその通りであった。西本はこの後阪急、近鉄といった弱小球団を率いて一から育て上げ何と両チーム合わせて七回も優勝させている。この大毎を入れれば八回だ。強豪チームを率いてのことではない。弱小球団を一から育て上げてのことである。球史に残る不世出の名将の采配だ。その彼の戦術に間違いがあろうか。いや、そんなことは断じてないのだ。西本幸雄という男のやることには。
「それを破ったのはやっぱりあの二人かよ」
「秋山と」
「ああ、土井だ」
誰もがここで自軍のベンチに引き揚げるその二人を見るのだった。彼等は今互いのその肩を叩き合いにこやかに笑い続けている。
「特に今回は土井だな。あいつが全てを決めた」
「そういえば見事なバントの処理だったな」
「そうだな」
あらためてこのことが話される。
「秋山だけじゃないってことか」
「土井も凄いのか」
「一流のピッチャーのボールを受けられるのは一流のキャッチャーだ」
誰かが言った。
「そのピッチャーの能力を引き出せるのも」
「それもかよ」
「そしてそのキャッチャーの能力を引き出せるのもな。お互いなんだよ」

こう言われるのだった。ここでは土井のその守備により全てが決まった。結局シリーズはこのスクイズが決定的なポイントとなり大洋はそのまま四連勝した。三原マジックの起こした奇跡と言われているがその立役者は間違いなくこの二人であったのである。

しかし土井はキャッチャーとしてはともかくバッターとしては頼りない男であった。実に打てなく遂にある年フロントにおいてこんな話が出たのであった。

「土井君はなあ」

「そうだな。打てないしな」

やはりこの話が為されるのであった。

「ここは打てる若いキャッチャーでいって」

「彼はトレードに出すか」

こう話されるのであった。

「もうな」

「そうするか」

この話は当人の耳にも入った。彼はそれに対して穏やかに受けるだけであった。トレードは野球選手の常であると言われていたからである。

「それならそれでいいさ」

「いいわけないだろう!?」

だがこれに対して怒った者がいた。

「それでいいわけないだろうが」

秋山だった。彼は穏やかに受け入れていた土井に対して怒った声で言うのだった。

「言ったよな。わしのボール受けられるのは御前だけだって」

「ああ。それか」

「わしは御前以外とバッテリー組みたくないわ」

そしてこうも言うのであった。

「絶対にな。そやからわしがフロントに言うわ」

フロントに直談判するというのだ。彼自身のことではないという

のにだ。
「御前が大洋におれるようにな」
「わしにそこまでか」
「当たり前やろが。バッテリーじゃ」
秋山はまたこのことを言う。
「御前に受けてもらわなわしは投げられんのじゃ」
そうして実際に彼は土井のトレードの話をなかったことにしてくれるようフロントに直談判した。それにより土井は大洋に残り二人のバッテリーは続いた。
秋山は昭和四十二年で引退した。その翌年土井も引退した。二人の花道は巨人の如き偽者の人気だけはある球団のスター選手のそれとは違い実に静かなものであった。
しかし彼等は高校から引退までバッテリーであり続けた。その絆はずっと続いたのだ。
「今まで有り難うな」
「今までじゃないだろ？」
土井も引退したその年の暮れに二人は居酒屋で飲んでいた。土井はそこで礼を言ってきた秋山に対して笑って言ったのである。
「俺達は引退はしたけれどな」
「ああ」
「それでもバッテリーだろ？」
こう彼に言うのであった。
「これからもずっとな」
「そうか。野球だけじゃなくてか」
「そうだよ。ずっと一緒だったんだ」
秋山のその顔を見ての言葉である。
「だからこれからもずっとな」
「バッテリーか。そうだな」
「ああ。だからこれからもな」
土井は微笑んで秋山に告げた。

「御前のボール、受けさせてもらうからな」
「じゃあ俺も投げさせてもらうな」
秋山もまた微笑んで土井に告げた。
「ずっとな」
「俺達が生きている限りな」
これが二人の絆であった。我が国のプロ野球の歴史は長いはここまで強い絆を持ったバッテリーはいなかった。今後も出ないのかも知れない。少なくともここに書き留め少しでも多くの野球を愛する人達にこの絆のことを知ってもらいたいと思いながら筆を置くことにする。今はもう泉下の人となってしまった秋山登ことを思いながら。

純粋な絆　　完

２００９・６・３０

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1417i/

純粋な絆

2010年10月8日15時14分発行